

看護学生のコミュニケーション演習において認知症 高齢者を演じた模擬患者の経験

著者名(日)	佐野 望, 北川 公子, 田中 敦子, 野田 陽子
雑誌名	共立女子大学看護学雑誌
巻	3
ページ	21-28
発行年	2016-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1087/00003091/

研究報告

看護学生のコミュニケーション演習において 認知症高齢者を演じた模擬患者の経験

Role play experience in communication training for nursing students by,
simulating demented elderly patients

佐野 望 北川 公子 田中 敦子 野田 陽子
Nozomi Sano Kimiko Kitagawa Atsuko Tanaka Yoko Noda

キーワード：認知症高齢者、模擬患者、看護学生、演習、経験

key words : elderly people with dementia, simulated patients, nursing students, practice, experience

要 旨

本研究の目的は、認知症高齢者とのコミュニケーションを課題とした演習で、高齢者役をつとめた模擬患者の演習に向けた準備から実施までの一連の過程における経験の内容を明らかにすることである。研究方法は、演習に参加した模擬患者8名に「看護学生との演習や看護学生へのフィードバックを通して感じたこと、考えたことについて」インタビューからデータを得て質的に分析した。結果、〈認知症を演じる不安を乗り越え、経験と学びを生かして演じる〉、〈将来の自分を思い描く〉、〈看護学生との思いの違いを感じる〉、〈看護学生の不安やあせり、失敗を受容する〉、〈看護学生の気づきを広げる手助けをする〉の5個のカテゴリーで構成されていた。演習に参加した模擬患者の一連の経験は、模擬患者自身の成長や老いと向き合う機会となっているという自分自身に向けた経験と、若い人々の成長に貢献したいという助言者としての役割を果たすという経験であった。

Abstract

Patients' experiences were simulated and investigated from preparation to execution during a practical on "communication with elderly people with dementia." Interviews were conducted with simulated patients ($N=8$) that were role played by participants in communication training. Interviews were conducted on simulated feelings of patients and thoughts about role playing with nursing students, as well as on providing feedback. The data were analyzed qualitatively. Results indicated the following categories: (1) overcoming anxiety about playing the role of elderly people with dementia and performing based on experience and learning, (2) imagining the future of oneself, (3) differences in thinking between nursing students and simulated patients, (4) accepting nursing students' anxieties, impatience, and failures, and (5) helping nursing students expand their awareness. It was suggested that the experience of being simulated patients' provided the students with opportunities to develop themselves and helped them face the process of their own aging. Furthermore, this experience was educational because it contributed to the development of the students.

I はじめに

看護教育の教育課程は、授業、看護技術修得の演習などを経て、臨地実習で実際の看護を体験することを通して看護を学ぶという特徴がある。看護学生は、臨地実習で看護を展開する際に、授業や演習で得た知識、技術、態度を統合し、対象となる人の個別な看護を提供することで、看護学生個人の看護観を深められるのである。臨地実習の特性である、看護の対象となる人との看護体験は、授業や演習では教授し難い学習形態と言える。そのため、学生は対象者の反応を見ながらその人に合った個別な援助をその場その場で考え実施を繰り返す、その場限りの体験から看護について深く学ぶ機会を得ることができる。そして、この学習形態では、学習者である看護学生の体験不足と知識不足を補うために臨地指導者や教員の助言が重要になる。よって臨地実習では、看護学生、患者、指導者の3者により学習が成り立つと言える。

講義や演習では臨地実習のような学習形態を作り出すことは難しい。そのため、学習目標に合った看護の対象となる人を招いて授業を展開するような工夫を取り入れることもある。特に、疾病を患った人に対する看護の学習では、患者を演じる模擬患者 (Simulated Patient: 以下、SPとする) に協力を得て授業を展開する SP 参加型学習が活用されている。SP 参加型学習では、授業を計画する看護教員が準備した教材を、看護学生と SP との関わり合いから、準備された教材を使いながら様々な学習が生まれる。さらに演習後に実施される SP からのフィードバックは、演じた症例の患者の心情が語られ、援助の工夫についてのアドバイスも学生へ伝えることができる。そのフィードバックが有効に看護学生に伝わるような橋渡しとして看護教員の助言が必要となる。このように SP 参加型学習は、学習者である看護学生と、リアリティを提供する中心人物である SP と、授業の計画と教材を準備し、演習の学習への助言者である看護教員の3者が共同して作り上げる学習である¹⁾。また、臨地実習の疑似体験となり、看護学生が体験を通して看護について思考する教育方法として構成することができる授業と言える。そして、授業や演習との違いは、リアリティのある

SP を対象として看護学生が関わる援助がその場限りの一回性であることと、SP が演じた看護の対象者としての心情を語ることで、看護学生が対象の真意に触れられることである¹⁾。SP 参加型学習は、臨地実習の疑似体験ができ、なおかつ、疑似ではあるが患者の真意を聞くことができる特性を持つ。

近年の看護基礎教育で活用される SP 参加型学習の内容は、年齢、疾患を具体的に提示した患者に対するバイタルサインの測定や車椅子移乗、排泄、清潔などの日常生活援助、看護提供場面での対人援助としてのコミュニケーションなどの技術教育が多い²⁾。特にコミュニケーション技術の修得は、人格的存在のある対象者として SP を活用することで、看護学生がリアリティと適度な緊張感を体験しながら、コミュニケーションの重要性を実感でき、学習意欲が高まる効果がある²⁾と報告されている。また、客観的臨床能力試験 (Objective Structured Clinical Examination: 以下、OSCE とする) で活用される標準模擬患者 (standardized patient: 以下、標準 SP とする) は、一定のレベルで標準化され、学習者に対して公平かつ公正に対応できる特徴がある。これに対し SP は、シナリオで提示された患者像を演じるが、自分の性格や生活背景に合わせて自由度の広い演技ができ³⁾、援助する学習者の対応に合わせて個別な反応や自由に表現できる力量をもつ⁴⁾。よって SP の特徴は、援助を受けて示す反応や自由な表現が SP の個別な準備や体験を反映できることであり、標準 SP との大きな違いがここにある。このような特徴を持つ SP への期待は、単に患者らしく振舞うという役割から、メッセージを送り、学習者に働きかける役割へと高まっている⁵⁾。

これまでの SP 参加型学習に関する授業研究では、看護学生の学びについて明確にされ⁶⁻⁸⁾ つつも、SP が演習に協力するに至るまでにどのような経験を得ているのかは明らかにされていない。看護学生、SP、看護教員の3者が共同して作り上げる SP 参加型学習において、SP が演習に協力することで得られる経験を明確にすることは、これまでに得られた看護学生の学びの知見と鑑みることによって、看護教員の役割である演習授業の計画や教材準備への発展に寄与できると考える。そこ

で本研究では、SPらの演習に向けた準備から演習の実施に至る過程においてどのような経験をしているのか、そしてその経験から得る内容について検討することとした。

Ⅱ 用語の定義

本研究では、「模擬患者」と「模擬患者参加型学習」を次のように定義した。

模擬患者（SP）とは、医療に従事していない一般の人が、医療系の学習者の教育のために一定の訓練を受けて、実際の患者と同じような症状や会話を再現する患者役を演じる人である³⁾。また、模擬患者参加型学習とは、SPが参加する授業形式⁹⁾である。

Ⅲ 目的

本研究の目的は、「認知症高齢者とのコミュニケーション」を学習課題とした演習において、認知症高齢者役をつとめたSPが、演習にむけた準備から演習の実施までの一連の過程で経験した内容を明らかにすることである。SPの経験の内容を明確にすることで、大学教育における演習に向けた授業計画や教材の工夫への発展へつながると考えた。

Ⅳ 方法

1. 調査対象と演習の概要

調査対象は、某組織で訓練を受けたSPである。当該演習のSPの依頼条件は、事例が認知症になった高齢な女性であったため、年齢はなるべく中高年であることと、性別は女性とした。そして、演習の終了後に本研究の趣旨について説明を受け、調査協力を承諾した8名とした。

SPが参加した演習は、看護学生2年生を対象とした老年看護学における認知症高齢者とのコミュニケーションに関する演習である。事例概要は次の通りである。特別養護老人ホームに入所し2週間を経過した81歳の女性の事例である。この女性は、3年前に夫が亡くなったことを機に認知症症状が出現し、独居生活が困難になり家族の介護力も不足しているため施設に入所した。認知症症状は、夫の死を認識できず自宅へ帰りたという願望を日々訴えている。演習の看護場面の設定は、実習2日目の看護学生が自宅へ帰りたとい

訴えるSPに対応するとした。

2. 調査方法

1) 調査期間

調査期間は、2014年11月から同年12月までである。

2) 調査内容

調査内容は、①SPの背景（年代、模擬患者の活動年数、認知症高齢者のSP経験回数）、②SPが演習に向けて行った準備、③看護学生との演習や看護学生へのフィードバックを通して感じたこと、考えたことである。

3) 調査の手続き

- (1) 当該演習終了後、調査対象に研究の趣旨、方法、倫理的配慮について文書と口頭で説明し、調査を依頼した。調査の承諾は書面で得た。
- (2) 質問用紙を事前に提示し、プライバシーが保護できる個室にて、グループインタビューを行いデータを収集した。グループインタビューは4名を1グループとし、2グループ実施した。その内容は、調査対象の許可を得てICレコーダーに録音し、逐語記録としてテキスト化した。

3. 分析方法

データの分析は、テキスト化したデータの意味を損なわないように一文一義の短文にし、意味内容の類似性に沿って、コード化、サブカテゴリー、カテゴリーと抽象度を上げた。なお、一連の作業において、共同研究者間との協議を重ねて表現を修正し、信頼性と妥当性を高めた。

4. 倫理的配慮

個人情報の保護について文書を用いて口頭で説明し、参加への同意を書面で得た。また、インタビュー内容から個人が特定されないように匿名化を図り、個人情報の保護に努めた。なお、本研究は共立女子大学の倫理委員会の承認（承認番号KWU-I RBA#14054）を得て実施した。

V 結果

1. 調査対象者の属性（表1）

調査対象者8名の性別は、全員女性で年齢は

表1 SPの属性

ID	年齢	SP活動年数(年)	認知症高齢者のSP経験有無
1	80歳代	17	有
2	60歳代	11	有
3	60歳代	10	有
4	70歳代	9	有
5	60歳代	9	有
6	80歳代	8	有
7	60歳代	4	有
8	60歳未満	4	無

60歳未満が1名、他は60～80歳代であった。SPの活動年数は、4～17年で幅があった。調査対象者の中で、SPとして認知症高齢者を初めて演じた者は、年齢60歳未満の1名であり、その他は複数回演じた体験者であった。

2. SPをつとめるために、準備から実施までの過程を通して経験したこと

グループインタビューの逐語記録を分析した結果、5カテゴリー、12サブカテゴリーが抽出できた。以下、カテゴリーを〈〉、サブカテゴリーを《》、コードを【】で示す。

カテゴリーは表2のように、〈認知症を演じる不安を乗り越え、経験と学びを生かして演じる〉、〈将来の自分を思い描く〉、〈看護学生との思いの違いを感じる〉、〈看護学生の不安やあせり、失敗を受容する〉、〈看護学生の気づきを拡げる手助けをする〉であった。

1) 〈認知症を演じる不安を乗り越え、経験と学びを生かして演じる〉

〈認知症を演じる不安を乗り越え、経験と学びを生かして演じる〉には、《介護体験を振り返り、演技に生かす》、《他者の介護体験から学ぶ》、《認知症ゆえの不確かさや多様さを不安に思う》、《自分なりの信念を持って演じる》の4つのサブカテゴリーがあった。

SPは演習前の準備において、【様々な介護体験を思い出す】中で、【うまくいった認知症の家族への対応をまねる】といった《介護体験を振り返り、演技に生かす》工夫をしていた。自己の体験以外に、【介護体験者の話を聴く】あるいは、書籍で【介護体験談を読む】ことで、《他者の介護

体験から学ぶ》努力をしていた。SPは、自己の学びから【認知症の症状は多様なので正解がわからない】ため、【役作りがこれでいいのか不安に思う】気持ちを抱き、《認知症ゆえの不確かさや多様さを不安に思う》気持ちを抱いていた。SPは自己の役作りに不安を持ちながらも、【事例の症状を演じる】ことと、【事例になりきって場面の展開を工夫】し、《自分なりの信念を持って演じる》ことに専念していた。

2) 〈将来の自分を思い描く〉

〈将来の自分を思い描く〉には、《認知症を自分に置き換えてその対応を考える》と《自分の将来の老いを想像する》の2つのサブカテゴリーがあった。

SPは【演じやすい年齢に近づいてきた】と感じ、【認知症高齢者の立場となり看護学生の対応について考える】ことで、《認知症を自分に置き換えてその対応を考える》ことができていた。また、認知症になり得る年代に近づいたSPは、【自分がいつ認知症になるか不安に思う】と同時に【老いる自分を見つめる】機会として、《自分の将来の老いを想像する》経験をしていた。

3) 〈看護学生との思いの違いを感じる〉

〈看護学生との思いの違いを感じる〉には、《(認知症役の)私を家に帰らせまいとする対応を受ける》、《認識できない真実を強要される》の2つのサブカテゴリーがあった。

SPは自宅へ帰りたいたと訴える場面で、学生から【施設から出ることを阻まれる】対応を受けた。その結果SPは、【家に帰りたいた気持ちがいつまでも続く】ことになった。これらのコードから、《(認知症役の)私を家に帰らせまいとする対応を

表2 認知症高齢者とのコミュニケーションに関する演習でSPをつとめるための、準備から実施までの過程を通して経験したこと

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
認知症を演じる不安を乗り越え、経験と学びを生かして演じる	介護体験を振り返り、演技に生かす	様々な介護体験を思い出す
		うまくいった認知症の家族への対応をまねる
	他者の介護体験から学ぶ	介護体験者の話を聴く
		介護体験談を読む
	認知症ゆえの不確かさや多様さを不安に思う	役作りがこれでいいのか不安に思う
		認知症の症状は多様なので正解がわからない
	自分なりの信念を持って演じる	事例の症状を演じる
事例になりきって場面の展開を工夫する		
将来の自分を思い描く	認知症を自分に置き換えてその対応を考える	演じやすい年齢に近づいてきた
		認知症高齢者の立場となり看護学生の対応について考える
	自分の将来の老いを想像する	自分がいつ認知症になるか不安に思う
		老いる自分を見つめる
看護学生との思いの違いを感じる	(認知症役の)私を家に帰らせまいとする対応を受ける	施設から出ることを阻まれる
		家に帰りたい気持ちがいつまでも続く
	認識できない真実を強要される	夫の死を認識していないのに、「死」という事実を知らされる (認知症役としての)私の世界を、「嘘になるから」と肯定してもらえない
看護学生の不安やあせり、失敗を受容する	看護学生の不安を包み込む	緊張や戸惑いで無言の看護学生に話題を提供する
		看護学生の小さな声を聞き返す対応
	看護学生のあせりや失敗感を包み込む	看護学生のやや強引な援助に対応する 「しまった」と思っている様子に気づいてあげる
看護学生の気づきを拡げる手助けをする	認知症の人の気持ちを代弁する	否定された時の心情を語る
		受け入れられたと感じた対応を伝える
		事実を伝えないほうが良いときもあると伝える
	言葉に頼り過ぎない関わりに気づかせる	非言語的コミュニケーションの大切さを気づかせる 沈黙の大切さを気づかせる

受ける」というサブカテゴリーにまとまった。また、夫の死を認識できない認知症高齢者に対する学生の対応により、SPが【夫の死を認識していないのに、「死」という事実を知らされる】ことになり、【(認知症役としての)私の世界を、「嘘になるから」と肯定してもらえない】気持ちを抱くことになった。よって、《認識できない真実を強要される》学生の対応としてまとめることができた。

4) 〈看護学生の不安やあせり、失敗を受容する〉
〈看護学生の不安やあせり、失敗を受容する〉には、《看護学生の不安を包み込む》と《看護学生のあせりや失敗感を包み込む》の2つのサブカテゴリーがあった。

看護学生との対話場面でのSPは、自己の気持ちを受け入れられない対応を受けるが、【緊張や戸惑いで無言の看護学生に話題を提供する】配慮や【看護学生の小さな声を聞き返す対応】をする《看護学生の不安を包み込む》といった対応をし

ていた。また、学生の積極的な【看護学生のやや強引な援助に対応する】ことや、【「しまった」と思っている様子に気づいてあげる】こともSPの許容の広さを示しており、《看護学生のあせりや失敗感を包み込む》ことで、看護学生の次への援助を促していた。

5) 〈看護学生の気づきを拡げる手助けをする〉

〈看護学生の気づきを拡げる手助けをする〉には、《認知症の人の気持ちを代弁する》、《言葉に頼り過ぎない関わりに気づかせる》の2つのサブカテゴリーがあった。

フィードバックにおけるSPの看護学生への助言は、【否定されたときの心情を語り】、【受け入れられたと感じる対応を伝え】、その違いから【事実を伝えないほうが良いときもあると伝える】といった、認知症高齢者が認識できている範囲がその人にとっての事実になることを伝えていた。これは、《認知症の人の気持ちを代弁する》役割となっていた。SPが人との関わりの中で重要であると捉えた要素として看護学生へ伝えたことは、【非言語的コミュニケーションの大切さを気づかせる】と【沈黙の大切さに気づかせる】であった。SPはこれらをまとめて《言葉に頼り過ぎない関わりに気づかせる》助言をしていた。

VI 考察

演習に参加したSPの一連の経験は、大きく2つの内容に分けられた。それは、SP自身の成長や自身の老いと向き合う機会となっているという自分自身に向けた経験と、若い人々のよりよい成長に貢献したいという年長者としての役割を果たすという経験であった。

1. SP自身の振り返りとこれからの自分を考える経験

SPは、演習に向けて、認知症を患った身内との関わりを思い起こして《介護体験を振り返り、演技に生かす》と共に、経験に不足があれば《他者の介護体験から学ぶ》ことで演技の準備をしていた。準備の過程でSPは、体験を振り返ること、知識を得ること、多様性に気づくことなど、SPの役割を担うための学習者としての経験を積んでいたと考えられる。今回のSPの年齢層が一人を除き60歳以上であることを踏まえると、模擬患

者の養成というボランティアな活動が、生涯学習の側面も有する可能性が示された。また、SPは年齢が事例の年代と近いこともあり、認知症やその対応を学習することで、《自分の将来の老いを想像する》といった、将来の自己を認知症高齢者として介助や援助を受ける立場になるのではないかと不安を抱いていた。

さらに、演習に向けてSPが学ぶ過程は、SP自身の発達課題とも向き合う機会となっていた。それは、SPの年齢が演じた事例の年代に近いため、自分を受容し愛するとともに、自分とは違う生き方や態度をも尊重し、そういう人を受け入れることができる¹⁰⁾ 高齢期の発達課題と向き合う経験になった。演習でのSPは、看護学生より【夫の死を認識していないのに、「死」という事実を知らされる】援助を受け、《認識できない真実を強要される》ことで〈看護学生との思いの違いを感じる〉ことになった。しかし、SPは〈看護学生の不安やあせり、失敗を受容する〉寛容な態度で、看護学生との思いの違いに対応することができていた。

2. 看護学生へのよき助言者としての経験

SPは演習を終了した後のグループ討議で、様々なアドバイスをフィードバックし、学習者が援助する自己を振り返るための情報を提供する役割を担っている¹¹⁾。今回の分析でも、SPは認知症高齢者の代弁者として、看護学生の対応に対する率直な気持ちや対応方法、コミュニケーション技法について、看護学生が自己を振り返るためのアドバイスをする経験が語られていた。

1) 認知症高齢者の代弁者

認知症高齢者の夫が待つ自宅へ帰りたくないという発言を看護学生に受け入れられず、施設の生活を強いられる発言や行動に対して、SPは、素直に【否定された時の心情を語る】ことで《認知症の人の気持ちを代弁する》経験をしていた。看護学生は、実際の認知症高齢者との関わりからこのような心の内を言葉として知ることは難しい。しかし、模擬状況とは言え、SPは看護学生が実際に認知症高齢者と関わる際の相手の立場に立つ視点を示唆できる存在であったと言える。

夫の死を認識できずにいるSPを援助する看護学生の対応は、事実を伝えないと嘘を肯定するこ

とになるという考えにより、SPは《認識できない真実を強要される》ことになった。認知症高齢者の立場に立てるよう学習し努力してきたSPは、【事実を伝えないほうが良いときもあると伝える】ことで、《認知症の人の気持ちを代弁する》といったリアリティを持って看護学生へ伝えることができる存在であった。

近年の認知症の知見の広がりや、認知症患者へのインタビューによる研究¹²⁾や、当人が自分の体験を言葉で語ることで、どのような世界の中に存在しているのかを世に広める¹³⁾ことで、医療や福祉に携わる者に認知症当事者への理解が深まりつつある。SPは当事者でもなく、保健医療福祉の専門家でもない、いわば素人であるが、発達課題が認知症高齢者と近いという点からは、より認知症高齢者の本音に近いことを語る存在であると考えられる。認知症高齢者を演じたSPの経験は、認知症高齢者に近い存在としての代弁機能と、看護学生のより学びに貢献したいという年長者である発達課題を活かした助言者としての代弁機能の両側面を発揮したことが大きな特徴であったと考えられる。

2) 看護学生のコミュニケーション学習への貢献

看護学生が何を話してよいのか分からない時や沈黙してしまう場面について、看護学生とSPとでは捉え方に違いがあった。看護学生は沈黙を埋めようと矢継ぎ早な会話を提供したが、SPは、高齢者にとって沈黙は大切な時間であるため、【沈黙の大切さを気づかせ】ていた。そして、SPは、手が冷たいですねと手をさする援助を提案し、体に触れる【非言語的コミュニケーションの大切さ】も示し、《言葉に頼り過ぎない関わりに気づかせる》といった、戸惑う看護学生に対して、年長者として鷹揚に受け入れ、その場に応じた対応を助言していた。

SPは、医療者ではない一般市民である。その一方で、看護教育機関でSPとして学習に協力する立場から看護教育に果たす役割も理解している。このように両者の立場を理解した人々が看護を目指す学生にメッセージを送ることでよりよい看護を目指すための教育内容を深めることができる¹⁴⁾と言える。両者の立場に立てるSPは、SP自身の過去の体験や演じるための様々な準備を基盤に、演習中に得られる看護学生の特徴と反応を

捉え演じる工夫を凝らすことができる。そして、看護学生へ疑似体験を提供し思考に変化をもたらすことができる存在であった。

3. SP参加型学習の発展への示唆

今回の分析を通して、高齢期にある人が看護教育へSPとして参加することは、高齢者ならではの特性を生かすことで、SP参加型学習をより発展させることができる示唆を得られた。それは、高齢者の豊かな経験から得た個々の持ち味を、SPの特徴でもある個別な反応、自由な表現として演技に反映できることにある。なぜなら、その人の固有な表現が演習にリアリティをもたらし、看護学生が臨床で求められるその場で考え対象に合った援助の実施を繰り返す学習になり得るからである。

また、いかにSP個人が経験した内容や看護学生へ伝えたい思いを演技の自由度に生かせるかは、SPと教員との事前の打ち合わせを十分に行い、その成果を演習の実態から把握し、SPと看護学生との有効なフィードバックが交差するよう助言することで学習を促進させる役割を担う教員の力量にかかっていると言える。

4. 今後の課題

SPは、将来自分が認知症になるかもしれないと想像することさえある点も示された。今後ますます高齢化が進む中で、高齢者の多様な社会参加や生涯学習の機会が求められる。本研究より、SP参加型学習での高齢なSPに対する養成は、生涯学習の側面も有することが考察できた。また、学ぶこと、適度な緊張を伴うこと、世代間交流の側面を持つことなど、リタイアした高齢者の社会参加としてプラスの側面も多く持っている。これらの生涯学習とプラスの側面を十分に活かすために、看護学生への学習効果のみならず、SPにとっての効果も加味した演習プログラムの工夫や、役作りのための認知症や老いについて学ぶ機会を設け、大学の教員が協力するなどの支援を模索する必要があると考える。そのためにも、高齢期にある人がSPとして演習に参加協力することによる経験の内容や意義について検討を重ねることも今後の課題となった。

Ⅶ 結 論

SPが認知症高齢者を演じるための準備から、演習での看護学生とのやり取りの実施から得たSPの経験は、SP自身に向けた経験と年長者としての役割を果たす経験であった。

SP自身に向けた経験では、生涯学習となる経験と、高齢期の発達課題と向き合う経験があった。演じるための準備として認知症の症状や適切な関わり方を学習すること自体が生涯学習の側面を有する経験であった。また、演じ看護学生からの対応を受け、自分とは違う考えを持つ看護学生を尊重し受け入れながら演習を進め助言をする高齢期の発達課題とも向き合うことを経験していた。

年長者としての役割を果たす経験は、高齢期の発達課題である後継者への継承の機会を経験していた。これは、認知症高齢者を演じることで受けた看護学生の援助内容や、援助する基盤となる考え方を捉え、認知症高齢者の代弁者となって援助の良し悪しを率直に表現し助言できる存在であった。

謝 辞

本研究に快くご協力いただきましたSPの皆様へ心より感謝申し上げます。

なお、本研究は共立女子大学総合文化研究所の平成26年度研究助成を受けて実施した研究の一部をまとめたものである。

引用文献

- 1) 竹田恵子, 太湯好子, 谷坂佳苗: 模擬患者 (SP) を導入した看護面接教育の取り組みとその課題, 川崎医療福祉学会誌, 14(1), 27-40, 2004.
- 2) 原島利恵, 渡辺美奈子, 石鍋圭子: 看護における模擬患者を活用したシミュレーション教育に関する

文献検討, 茨城キリスト教大学看護学部紀要, 4(2), 47-56, 2012.

- 3) 阿部恵子: 第Ⅱ部模擬患者のてびき 第4章模擬患者とは?, 鈴木富雄, 阿部恵子編, よくわかる医療面接と模擬患者, 名古屋大学出版会, 名古屋, 38-44, 2011.
- 4) 阿部幸恵: 第4章学習環境の整備—必要となるリソース 4.1 必要となる人材 看護のためのシミュレーション教育, 医学書院, 東京, 119-122, 2013.
- 5) 清水裕子: 第9回 看護教育への模擬患者活用, 看護展望, 9, 63-67, 2009.
- 6) 佐野望, 中原順子, 野田陽子, 他: 模擬患者を活用した高齢者看護学演習に関する文献検討, 共立女子大学看護学雑誌, 1(1), 25-32, 2014.
- 7) 加悦美恵, 落合恵子: SP (模擬患者) 参加型授業において学生が描く患者像の理解, 日本医学看護学教育学会誌, 16, 20-26, 2007.
- 8) 水戸優子, 大石朋子, 小山真理子, 他: 模擬患者を用いた看護技術演習における看護学生の「想定外」の経験, 神奈川県立保健福祉大学誌, 8(1), 73-79, 2011.
- 9) 清水裕子, 横井郁子, 豊田省子, 他: 看護教育における模擬患者 (SP; Simulated Patient・Standardized Patient) に関する研究の特徴, 日本保健科学学会誌, 10(2), 215-223, 2008.
- 10) 服部祥子: 生涯人間発達論 人間への深い理解と愛情を育むために, 医学書院, 東京, 133-139, 2001.
- 11) 阿部恵子: 第Ⅱ部模擬患者のてびき 第5章模擬患者になるには?, 鈴木富雄, 阿部恵子編, よくわかる医療面接と模擬患者, 名古屋大学出版会, 名古屋, 45-65, 2011.
- 12) 高山成子, 水谷信子: 中等度・重度痴呆症高齢者が経験している世界についての研究, 老年看護学, 5(1), 88-95, 2000.
- 13) クリスティーン・ボーデン著, 桧垣陽子訳: 私は誰になっていくの? —アルツハイマー病者からみた世界, クリエイツかもがわ, 2003.
- 14) 清水裕子, 鈴木玲子: 第10回 看護教育への模擬患者活用, 看護展望, 9, 69-73, 2009.